

十一世紀ビザンツ領南イタリアにおける混乱と繁栄

発表者 竹部隆昌

九世紀後半から十一世紀後半までの、約二百年に及ぶビザンツ帝国の支配下の南イタリアは、恒常的なシチリアからのイスラムの略奪の脅威にさらされ、また幾度かの現地での反乱が年代記で伝えられている。しかし、略奪と反乱については、支配の前半と後半で明らかな変化が見られる。略奪については、ビザンツ自体が一種の緩衝地帯として創設したカラブリア・テマが前半では主な被害地であったが、後半ではビザンツの南イタリア支配の根拠地バーリが位置するアプリア地方での被害が主になってくる。また反乱については、前半にはカプア＝ベネヴェントやサレルノというランゴバルド侯国の主導によるものであった。しかし、十世紀後半には両侯家共に断絶し、カプア＝ベネヴェントは 990 年代には群雄割拠の無政府状態に陥り、サレルノは実質的にアマルフィーと統合され、アマルフィーの親ビザンツ路線に合流することになった。結果として、南イタリアには反ビザンツ勢力は存在しなくなるというビザンツにとっては理想的な状況の中、なぜか後半にはビザンツのテマ内部での反乱のみが記録されている。長年ビザンツ領南イタリア住民の不満の種であったイスラムへの貢納のために強いられていた税金は、ニケフォロス＝フォーカス帝により既に廃止されていたにもかかわらず、反乱が多発しているのである。

また混乱を極めているはずなのにもかかわらず、十一世紀のカラブリアの諸修道院文書には、活発な農地の賃貸借契約の記録が残されており、ここからは養蚕用の桑を中心とした農業生産の向上が想定されている。また、修道院文書に記録される農地を借りた者の名前の中に、アラブ名のラテン語表記形とされるものも散見される。

略奪や反乱という危機的側面が確認される一方で、活発な農地契約という生産的側面が想定できるという相反する現象はどう解釈するべきであるのか。土地契約者であるアラブ人と、シチリアのイスラムによる略奪との関係はどう理解すべきなのか。

以上のことを踏まえて、本報告では十一世紀におけるビザンツ領南イタリア社会で、どのような変化が起きていたのかについて若干の考察を行なう。